

日本遺産
構成文化財
を訪ねる

東海道 箱根八里 散策地図



日本遺産「箱根八里」

旅人たちの足跡残る悠久の石畳道―箱根八里で辿る遥かな江戸の旅路―



「東海道五十三次」湖水園

「天下の嶮」と歌に唄われた箱根山を東西に越える筋の道、東海道「箱根八里」。江戸時代の大幹線であった「箱根八里」には、繁華な往来を支えるために当時の日本で随一の壮大な石畳が敷かれました。西国大名やオランダ商館長、朝鮮通信使や長崎奉行など、歴史に名を残す旅人たちの足跡残る街道をひととき辿れば、宿場町や茶屋、関所や並木、里塚と、道沿いに次々と往時のままの情景が立ち現れてきて、遙か時代を超え、訪れる者を江戸の旅へと誘います。

☆「日本遺産」とは

『日本遺産 (Japan Heritage)』は、地域の歴史的な魅力や独自の文化を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを文化庁が「日本遺産」として認定するものです。ストーリーを語る上で欠かせない魅力あふれる有形・無形の様々な文化財群を、地域が主体となつて総合的に整備・活用し、国内だけでなく海外へも戦略的に発信していくことにより、地域の活性化を図ることを目的としています。

神奈川県小田原市・箱根町、静岡県函南町・三島市を結ぶ旧東海道「箱根八里」は、江戸時代の街道旅を追体験するストーリーにより、二〇一八年五月に「日本遺産」に認定されました。「箱根八里」には、「日本遺産」を構成する多くの文化財があり、往時の旅を彷彿とさせる城下町や宿場町、一里塚、石畳、並木、関所、茶屋のすべてが日本で唯一現存しています。

☆「箱根八里」について

箱根旧街道「箱根八里」は、江戸時代初期に徳川幕府が整備した東海道の一部です。標高約一〇mの小田原宿から標高八四六mの箱根峠を登り、標高約二五mの三島宿まで下る八里(約三三km)の道です。

この道は、「天下の嶮」と歌に唄われたように、東海道第一の難所とされてきました。「箱根八里」のうち、小田原宿から箱根関所を通つて箱根峠までを東坂と呼び、箱根峠から三島宿までを西坂と呼んでいました。

箱根山は小田原の酒匂川(さかわがわ)と並び、外様大名の大藩のある西国から江戸を守るための最重要地でした。かつてこの険しい坂道をオランダ商館長の江戸参府に同行したシーボルト、将軍家の拝賀のために江戸に向かう朝鮮通信使の行列、長崎へ赴任する長崎奉行の一行、伊勢詣りや金毘羅参りの人々など、さまざまな旅人たちが行き交いました。

当初、箱根旧街道は雨や雪の時など腰までつかぬぬかるみとなるために竹が敷かれていましたが、延宝八年(一六八〇)に二間幅(約三・六m)で石が敷き詰められて以降、石敷きの道となりました。

「箱根八里」に現存する「一里塚」のうち、錦田一里塚は大正二年に国史跡に指定されました。平成一六年には、西坂・東坂の計約五kmが国史跡に指定されました。



■東海道の成り立ち

天正二八年(一五九〇)に江戸に移つた徳川家康は、慶長六年(一六〇二)東海道、中山道、日光街道、甲州街道、奥州街道の五つの街道と宿駅を制定。慶長九年(一六〇四)には、街道の幅員を五間とし、二里を三六町と決めて路傍には榎などを植えた二里塚を築かせた。また、街道の両側には道幅を特定するために並木を植え、それにより旅人たちのための木陰を提供した。



「箱根八里」あれこれ

■小田原宿

小田原が城下町として発展したのは小田原北条氏の進出後で、城は拡張され、その守りの固さで上杉謙信や武田信玄をも退けた。天正二八年(一五九〇)豊臣秀吉の小田原攻めにより北条氏は小田原城を明け渡す。領地は徳川家康に与えられ、その後西への防衛の要として大久保氏や稲葉氏などの譜代大名が小田原城に入った。

小田原宿は慶長六年(一六〇二)に成立。江戸を発つてから九番目の宿場で、起点の日本橋からの距離は約八〇km。手前の大機宿からは二六kmあり、その間に間の宿の梅沢や酒匂川があった。

幕府は江戸防衛のため東海道の主要河川に橋を架けなかったが、酒匂川も延宝二年(一六七四)に船渡しから徒歩渡しとなり旅人は川越人足の肩や鞆台で川を渡つた。小田原宿から次の箱根宿までは六kmあまりあり、険しい箱根越えを控え、ほとんどの旅人は小田原に泊まった。

小田原宿には本陣と脇本陣が四軒ずつあつて東海道で最多。旅籠の数は江戸時代

より宿駅伝馬制度が作られてから、七年後である。箱根越えの道の険しさに難儀した参勤交代の大名たちからの要請によるものともいわれている。

当初、幕府は元箱根への宿場の設置を検討したが、箱根権現の門前町であったことから新たに芦ノ湖畔を開拓。小田原宿と三島宿からそれぞれ五〇軒を移住させた。旧箱根宿の中心部には、今も小田原町、三島町の名前が残る。

その後、江戸から二〇番目の宿場として規模を拡大。江戸時代後期には、問屋場二軒、本陣六軒、脇本陣二軒、旅籠の数は三六軒あつたとされる。

箱根は温泉場としても知られており、奈良時代の発見とされる湯本など歴史ある温泉場が複数ある。三枚橋で東海道と分岐する七湯道の沿線には、湯本、塔之沢、堂ヶ島、宮ノ下、底倉、木賀、芦之湯があり、江戸時代の初め頃から箱根七湯として親しまれた。

江戸から気軽に訪ねることのできる箱根は行楽地として庶民の人気を呼び、浮世絵などにも多数描かれた。



江戸時代初期には、幕府の直轄地として伊豆国を管轄する代官所が置かれていた。当時、伝馬、久保、小中島、大中島の四町あたりが宿場の中心地となつており、この四町が中心となつて三島宿を運営していた。本陣には、この本陣と呼ばれた世古本陣と二の本陣・樋口本陣の二軒があり、脇本陣は三軒で旅籠の数は七四軒あつた。箱根越えを控えた西からの旅人は三嶋大社に祈願をし、無事に箱根越えを終えた東からの旅人は三島宿で山祝いをしたと伝えられている。

箱根八里

箱根一三島

構成文化財

1 「箱根八里」構成文化財スポット

富士山眺望スポット 資料館・博物館

バス停 ●●●●● 並木

「箱根八里」街道	石畳道	国道
東海道	有料・自動車専用道路	主要地方道・都道府県道

24 甲石坂
 坂道の途中に、かつて豊臣秀吉ゆかりとされる兜石があったことから甲石坂と呼ばれた。箱根竹におおわれた坂道は往時の風情を伝えている。

20 芦ノ湖と箱根神社
 富士山を背景に、箱根の山々に囲まれて清らかな水を湛える芦ノ湖。その畔に建つ箱根神社は、箱根の山々を祀り、参詣に立ち寄る多くの旅人で賑わった。

17 西海子坂
 箱根峠に向かう登り二町あまりの坂道。かつて付近に西海子の木があったためその名がついたとされる。

14 畑宿の集落
 江戸時代に宿場間に置かれた間の村のひとつ。宿泊はできなかったが、休憩ができる茶屋もあり険しい山道を行く旅人で賑わった。

25 山中一里塚
 街道のすぐ南側に1基残る一里塚。塚の上には、アセビやツツジが生えているが、江戸時代の記録には塚に木は植えられていないと記されている。

21 22 箱根旧街道の杉並木
 江戸時代に旅人を夏の日差しや冬の風雪から守るために杉を植えて並木を作った。冷涼湿潤な気候を好む杉の並木は東海道唯一で、天を衝く巨木400本あまりが街道の両側に連なる。

18 甘酒茶屋
 江戸時代から続く街道沿いの茶店。閉が裏のきられた茅葺の建物で甘酒が名物。旅行者が休憩するための施設として今も賑わう。

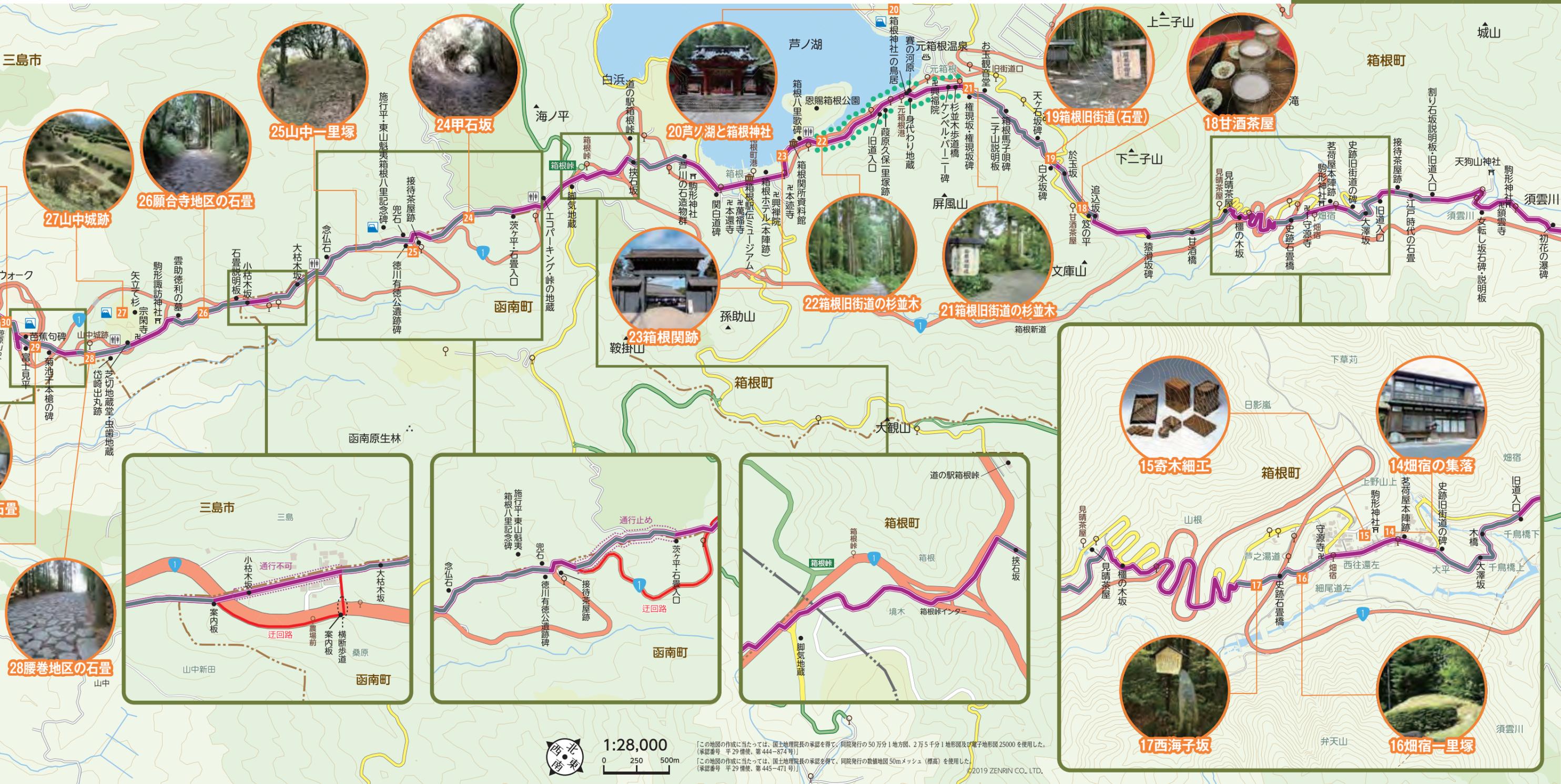
15 寄木細工
 異なる色の天然木を組み合わせて模様を作る寄木細工は、江戸時代から畑宿で盛んに作られるようになり、旅人の土産物として街道筋に知れ渡った。

26 願合寺地区の石畳
 江戸時代の絵図には6ヶ所の石橋が描かれており、発掘調査で出土した「一本杉の石橋」が往時のままの姿で保存されている。

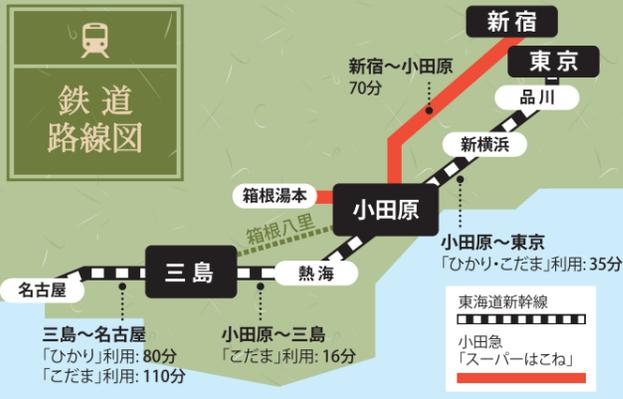
23 箱根関跡
 江戸時代、旅人の往来を監視するために箱根に置かれた関所。徳川幕府は、箱根山を江戸の防衛のために重視。関所は小田原藩によって管理運営され、特に「出女」に対しては、厳重な取り調べが行われた。

19 箱根旧街道(石畳)
 雨の日に足跡がつかぬ悪路と言われた東海道に、延宝8年(1680)に石を敷き詰め石畳の道にした。峠道の石畳の規模は当時日本随一。

16 畑宿一里塚
 江戸日本橋から23里目にあたる一里塚。直径約9mの円形に石積を築き小石を積み上げて土を盛って復元。塚の上には標識樹となる樅と楓が植えられた。



【この地図の作成に当たっては、国土地理院院長の承認を得て、同院発行の50万分1地図、2万5千分1地形図及び電子地形図25000を使用した。(承認番号 平29情使、第444-874号)】
 【この地図の作成に当たっては、国土地理院院長の承認を得て、同院発行の数値地図50mメッシュ(標高)を使用した。(承認番号 平29情使、第445-471号)】
 ©2019 ZENRIN CO., LTD.



● 鉄道・路線バスお得情報 2023現在

2日間有効 芦ノ湖きっぷ
小田原駅～箱根町港(H・K・R路線)の箱根登山バス+小田原駅～箱根湯本駅の箱根登山鉄道+箱根町港・元箱根港～桃源台港の箱根海賊船 乗り降り自由
箱根登山バス(小田原営業所) Tel.0465-35-1271

1日フリー 三島1日券みしまるきっぷ(フリーきっぷ)
三島市内～箱根峠間の東海バスの路線バス1日乗り放題
※箱根周辺の観光施設の優待券付 東海バス
大人1,100円/子供550円 Tel.055-935-6611

2日間または3日間有効 箱根フリーパス
小田原線往復(出発駅～小田原まで)+指定区間内乗り降り自由(箱根登山電車、箱根登山バス、箱根登山ケーブルカー、箱根ロープウェイ、東海バス他)
※箱根周辺の観光施設の優待・割引特典付
大人5,000円/子供1,000円(2日間の場合) 小田急お客さまセンター Tel.044-299-8200
※小田原駅発で、乗り物乗り継ぎの場合

箱根八里 お問い合わせ

箱根八里街道観光推進協議会
〒411-8666 静岡県三島市北田町4番47号
(三島市産業文化部商工観光課内)
TEL.055-983-2656 FAX.055-983-2754
E-mail.syoukou@city.mishima.shizuoka.jp

小田原市 経済部観光課
〒250-8555 神奈川県小田原市荻窪300番地
TEL.0465-33-1521 FAX.0465-33-1286
E-mail.kanko@city.odawara.kanagawa.jp

箱根町 企画観光部観光課
〒250-0398 神奈川県足柄下郡箱根町湯本256番地
TEL.0460-85-7410 FAX.0460-85-6815
E-mail.web_kankou@town.hakone.kanagawa.jp

三島市 産業文化部商工観光課
〒411-8666 静岡県三島市北田町4番47号
TEL.055-983-2656 FAX.055-983-2754
E-mail.syoukou@city.mishima.shizuoka.jp

函南町 建設経済部産業振興課
〒419-0192 静岡県田方郡函南町平井717番地の13
TEL.055-979-8173 FAX.055-978-3027
E-mail.sangyo@town.kannami.shizuoka.jp

2023現在



36/37 錦田一里塚
街道の両側に一对2基残る一里塚は、東海道では7ヶ所のみ。塚の上には榎があるが、江戸時代の記録には、南側は榎、北側は松と記されている。



33 笹原一里塚
街道から少し離れた南側の高台に1基残る一里塚。塚の上には椎の木が生えているが、江戸時代の記録には松と記されている。



30 富士見平の眺望
東海道を通行する旅人に広く知られた富士山の眺望地で、旅日記や絵画などに記録された。付近には、箱根越えの時に詠んだとされる松尾芭蕉の句碑がある。



27 山中城跡
小田原防衛のため後北条氏により築かれ、天正18年(1590)に豊吉の小田原攻めにより落城した底をワッフルのように掘り残した「堀」がみどころ。街道を挟んで築かれ、関所の役割も担っていた。



38 箱根旧街道の松並木
西坂を下り、三嶋大社へと続く旧街道沿いに残る松並木。約1km続く松並木は現在の東海道では最長。源頼朝に因む初音ヶ原の地名が残り、富士山の眺望地でもある。



34 畑作地帯からの眺望
街道沿いの新田集落の人々は、明治になり通行量が減ると、箱根山西麓の山肌を開墾。耕作地を広く畑作に生活の糧を求めた。富士山を背景にした大根干しは三島の初冬の風物詩となっている。



31 上長坂地区の石畳
江戸時代の石畳設計書に「水はき」と記載されている「斜めの排水路」が現在も残る。一部の区間はトンネルの上に石畳が復元されている。



28 腰巻地区の石畳
腰巻地区の石畳の下からは山の堀の跡が出土。山中城の岱丸(だいざきでまる)の堀を一部たてて街道を造ったとされる。



39 三嶋暦と三嶋暦師の館
仮名文字で印刷された日本最古の暦とされる。文字の美しさ線の繊細さに定評があり、東海道土産としても知られた。暦師の館は三嶋暦を製造販売してきたと伝えられる河合家の旧宅を活用した博物館となっている。



35 普門庵の仏像
伊豆半島最大の観音菩薩坐像と脇侍の不動明王、毘沙門天立像を祀る。観音菩薩坐像を背負った旅の僧がこの地で動けなくなり、菩薩のお告げと思い庵を結び像を祀ったという伝承がある。



32 笹原地区の石畳
笹原新田は、東海道の整備にともない開かれた5つの新田集落のひとつ。このあたりまで峠道を下ると視界が開け、駿河湾と伊豆半島を一望できる。



29 浅間平地区の石畳
浅間平地区富士見平は、江戸時代の旅日記「東街便覧図略」富士山の眺望地点として描かれ、一部の区間はトンネルの上に石畳が復元されている。



40 三嶋大社
伊豆の国一宮として、源頼朝をはじめとした武家の崇敬を集めた。本殿・幣殿・拝殿は国の重要文化財。宝物館には国重文に指定された収蔵品が展示されている。



41 三島宿の湧水河川
三島宿の中を流れる複数の小河川は富士山の湧水を水源とする清流で、宿場の人々の生活用水、灌漑用水として使われた。旅人もこの水でのどを潤し、夏は水辺で涼を取った。



42 三石神社の時の鐘
三島宿に時刻を知らせるため、寛永年間(1624～1643)に三石神社境内に設置された。江戸時代から旅人や三島宿の人々に親しまれており、三島八景の一つにも数えられていた。



43 鰻料理
三島宿の人々は鰻を三嶋大社の神の使いとして保護。幕末に薩摩の兵が食しても神罰が下らなかつたことから三島でも食べられるようになったという。三島の鰻は富士の湧水と職人の技により名物として知られる。

